

Title	ベルクソンの自由と感受性
Author(s)	加藤, 憲治
Citation	カルテシアーナ. 1991, 11, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66945
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベルクソンの自由と感受性

加 藤 憲 治

『意識の直接与件についての試論』（以下『試論』と略す）においてベルクソンは、空間とは区別される純粹持続を見出した。彼によれば或る哲学的諸問題はこの持続と空間とが区別されなかったことに由来し、両者の区別がなされる限りこの諸問題は解消されることになる。そしてベルクソンはこの諸問題の中から特に自由の問題を選ぶ。

この自由に対するベルクソンの見解は『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』と略す）に到るまで進展していくが、基本的見解は『試論』において示されていると考えることができるだろう。そこで小論では自由に対するベルクソンの基本的見解を明らかにするために、まず自由と持続との関係を確定する。その上でベルクソンの自由とみなされる予見不可能性 *imprévisibilité* の自由、有機的必然性 *nécessité organique* の自由、そして選択 *choix* の自由を検討することによって、ベルクソンの自由の本質を解明したい。

第1節 自由と持続との関係

自由と持続との関係を考察するまえに、『試論』のベルクソンがどのようにして「自由の事実 *le fait de la liberté*」(M, 964) を明らかにしたかを見ておこう。この自由の事実を明らかにするために『試論』第三章でベルクソンは、決定論が成り立たないことを示すと同時に、この決定論に反論する自由の考え方も批判する。つまり、持続と空間とを混同した従来の自由の考え方では必ずと決定論に陥るのである。この自由の問題に対する従来の考え方の批判は、以下のように三段階に分けてなされる。

第一に行為の選択という点についてベルクソンは、すでに遂行された行

為を遂行されつつある行為であるかのように論じる決定論を非難する。なぜなら、行為が果たされたあとでは、その行為は必然性しか示しえないからである。それゆえ、別のように選択することができたかもしれないと反論することによって、自由を主張することはできないのである。

第二にベルクソンは、すべての先行条件を知るならば、未来の行為を予見することができるという決定論を斥ける。ベルクソンによれば、すべての先行条件をあらかじめ知るとことは、具体的持続において行為の瞬間そのものに身を置くことであり、そこでは予見することは問題になりえないからである。したがって、すべての先行条件を知っても予見できないという点に自由は求められない。

第三にベルクソンが批判する決定論は、或る原因には或る結果が必然的に対応するという物理的因果性を心理事象に持ち込もうとする決定論である。というのは、持続を本質とする心理事象と物理事象とが区別される以上、物理的因果性は心理事象に妥当しないからである。それゆえ、逆に、行為がこの因果性に支配されないことに自由を見出そうとすることもできない。

こうしたベルクソンの批判をみるならば、『試論』は決定論に対する反論によって自由を擁護しているにすぎないように思われる。なるほどベルクソンは、「具体的自我とこの自我が遂行する行為との関係を自由」(DI, 165)と呼んでいる。しかし、彼によればこの両者の関係を定義するのは困難である。このベルクソンの見解からすれば、ユッソンが指摘するように¹⁾、『試論』は自由の概念を積極的に取り上げていないと考えることもできる。つまり、ベルクソンが行なう決定論の否定は自由の肯定の必要条件であるという意味で、『試論』は消極的にしか自由を示していないのである。

したがって、決定論の否定によって即座に自由が肯定されるわけではない。ここで「常識が自由意志 *libre arbitre* を信じている」(DI, 112)とか、「自由は事実である」(DI, 166)とか単に言っても、それは無意味だろう。また、「私たちの誰もが、現実にせよ、錯覚にせよ、自由な自発性

libre spontanéité の感情をもっている」(DI, 106, cf. DI, 163) とベルクソンは言う。しかし、自由に行動していると信じていても、後でそれが誤りだと分かることがあるならば (DI, 127), この自由な自発性の感情が錯覚でないという保証はないように思われる。

それでは、『試論』のベルクソンは本当に自由の概念を積極的に提示していないのだろうか。確かに『試論』の自由論は『二源泉』にみられる神的自由へと展開されていくものである。けれども自由論が展開されるためにはその核となる自由論が『試論』になければならないはずである。

また『試論』が自由を提示できていないとするならば、それはベルクソン哲学にとって困難な事態に到るだろう。なぜなら、自由の問題は、ユッソンが言うような²⁾、哲学的諸問題の一例にすぎないのではないからである。自由の問題は、神の存在とその諸属性に関する神の問題を決定する、とまでユードのように解釈しなくても³⁾、少なくとも、自由の問題は、持続の問題を決定すると解釈できる。つまり、自由が持続と空間との区別のうちに、結局持続のうちに見出され得るとすれば、逆にこの自由こそが持続の存在を証するといえる。とすれば、私たちはベルクソンの自由の概念を何よりも明らかにしなければならない。

その際ベルクソンの自由の拠り所となるのは、持続である。自由行為に到る熟慮の例に従うならば、自由は動的進行 *progrès dynamique* にある (DI, 137)。この動的進行としての持続のうちに自由が求められるならば、私たちの存在を構成しているのが持続である以上 (PM, 185, cf. DI, 149), 私たちは自由な存在であると言い切れるだろうか。この見解は、「人間は自由のなかに浸っている……」⁴⁾、というジャンケレヴィッチと同じであろう。しかし、持続に自由を、空間に必然性をという二分法に陥りやすいこの見解をベルクソンはとらないだろう。なぜならば、ベルクソンにとって自由は持続する自我とこの自我が遂行する行為との関係の中に、換言すれば持続する自我が自由行為に到る進行のうちに見出されなければならないからである。さらに、持続が私たちの存在を構成しているからといって私たちが自由であることは稀である。それゆえ、ベルクソンは「多くの人々

は……真の自由 *vraie liberté* を知ることなく死ぬ」と言う (DI, 125, cf. DI, 126, 174, 180)。

しかし、これに対してベルクソンの次の言明はいかに理解されるべきだろうか。「……私たちの自由な活動の過程は、いわば私たちの知らないうちに、持続のすべての瞬間に、意識の漠たる深みにおいて続いている……」 (DI, 178 n., cf. DI, 127)。この言明を理解するためには、ベルクソンにおける自由の程度 *degrés* という問題と自由と習慣の関係という問題とを考察しなければならないだろう。ここでこれらの問題に立ち入ることはできないが、ベルクソンによれば自由には、生物的レベルから精神的レベルに到るまで、程度がある (DI, 125, cf. MM, 250)。しかも、自由な行動といえども習慣化されて自動運動となると、この運動は自由を覆ってしまう (DI, 178, cf. EC, 265)。とはいえ、この自動運動は新たな自由活動の基体 *substrat* を成すのである (DI, 127)。この点でベルクソンの自由は段階的な層を形成しており、意識されない自由活動は新たな自由活動の基体の役割を果たしていると考えられることができるだろう。

このように理解するならば、ベルクソンの自由は持続のうちにというよりは、自由行為のうちに求めなければならないといえるだろう (Cf. DI, 130)。ベルクソンにとってこの自由行為は、「私たちが或る重大な決定を選んだ、私たちの存在 *existence* の瞬間」 (DI, 179) にある。すなわち、自由行為は重大な決定をする持続の瞬間にあり、この瞬間は、私たちの存在が、つまり持続が収縮 *contraction* する瞬間である (Cf. EC, 201f, 238)。自由行為のうちに自由を求めるといふ主張は、当然といえば当然である。しかし、この主張のもつ意味は大きい。なぜなら、この主張は、従来の自由についての議論のように、自由を行為の過去や未来において考える仕方とは根本的に異なるからである。

そこで、この自由行為に見出される自由とは、取りも直さず持続する自我が自由行為に到る進行の中にあることになる。では、ここで見出されるベルクソンの自由はどのようなものだろうか。このベルクソンの自由を明らかにするために、まず予見不可能性の自由についてみてみよう。

第2節 予見不可能性の自由

一般にベルクソンの自由の特質として挙げられるのは、自由行為の予見不可能性である⁹⁾。この自由行為の予見不可能性は持続の在り方に拠るものである。すなわち、ベルクソンにとって持続は「連続的創造」であり、「新しさの絶えざる湧出」である (PM, 9)。ベルクソンの自由が持続のうちに求められる限りにおいて、この自由は創造、新しさ、つまり、予見不可能性という性質に与かることになるだろう (PM, 10)。

実際、予見するための条件ということを考えてだけで、持続における自由行為の予見不可能性を理解することができるはずである。通常或る行為を予見する条件として、原因がその結果を再生するといういわゆる因果性が認められなければならない。しかるに、持続において同じ瞬間は二度と現れない以上、同一の原因を語ることはできず (DI, 150)、いわゆる因果性は成り立たない (DI, 175)。それゆえ、自由行為は予見不可能である。そもそも、予見することは「未来が過去に類似する」ということが前提されているが (M, 713)、持続においてこの前提はありえないのだから、自由行為は予見できない。

次に自由行為の予見不可能性と理由との関係を考察するならば、ベルクソンは自由行為がみられる決意という場面を以下のように説明する。「私たちは理由なしに *sans raison*, おそらくあらゆる理由に反してさえ決意する」 (DI, 128) と。つまり、決意が理由なしに、理由に反してなされるならば、その決意は全く予見できないということになる。この説明に続けてベルクソンは、「明白な理由がないということは、私たちが根本的に自由であればそれだけ顕著である」 (DI, 128) と主張する。

またベルクソンは、私たちが決意するために理由を探しているときにはすでに決意してしまっている、つまりすでに意志してしまっている、と言う (DI, 119)。このことから予見不可能性の自由は、理由なしに意志することに基づいていると考えられる。「自己自身に還ろうと意志するたびごとに私たちは自由である」 (DI, 180) とするならば、この意志に自由の本

当の始まりをみることもできるだろう⁶⁾。

しかし、この考え方に対して、ベルクソン自身が提示している疑問を投げかけることができるように思われる。すなわち、「意志は意志するために意志する *vouloir pour vouloir* ときでさえ、或る決定的な理由に従っているのではないか、そして、意志するために意志することは自由に意志することなのかどうか」(DI, 119) という疑問である。この疑問にベルクソン自身は答えていない。けれども、ベルクソンは意志するために意志するという意志の超越を認めないだろう。

その根拠は、意志するために意志するということを認めれば、それは自ずと無限背進になるからである。この点で「意志することを意志するという無数の分裂は、ただ意志するという単純さに突然収縮する」⁷⁾ というジャンケレヴィッチの言説は説得力をもつとは言い難い。さらに、ベルクソンは『二源泉』の中で「本能と習慣以外には、意志に対する直接の働きは感受性 *sensibilité* の働きしかない」(MR, 35) と述べているからである。それゆえ、ベルクソンは意志するために意志するということを認めているわけではなく、意志することに自由の本当の始まりをみることはできないように思われる。

また、予見不可能性の自由が理由なしに意志することにあるという解釈を先に示したが、『試論』のテキストは別の解釈を受け入れる余地がある。すなわち、「理由なしに *sans raison* 決意する」というテキストは、本当に理由なく決意するという意味ではない。そうではなく、理由があるにもかかわらず、その理由に注意しようとしなかったために (DI, 127), 理由なしであるかのように決意した、と解することもできるのである。

この点についてユードは以下のように解釈する⁸⁾。理由なしに *sans raison* 決意するというのは、諸理由なしに *sans raisons*, あるいは或る理由なしに *sans une raison* 決意するという意味であり、特定の理由なしに *sans la raison* 決意すると言う意味ではない。つまり、私たちが決意するのは特定の理由をもってであり、この特定の理由は、ベルクソンの言葉によれば、幸福や名誉についての個人的観念に対応するものである (DI,

128) と解釈する。

実際、ベルクソンの自由の特質が予見不可能性にあるからといって、ベルクソンの自由は気まぐれなものではない (EC, 47, M, 1152)。また、「私たちが決定した理由を一層明晰に意識すればするほど私たちは自由である」というブランシュヴィックの意見に、ベルクソンは一応同意しているのである (M, 586)。とすれば、ベルクソンの自由は或る種の必然性を伴うと解釈できる。

このようにベルクソンの自由の特質として予見不可能性をみてくるならば、予見不可能性の自由が意志することに基づくとしても、この意志が或る種の必然性に応じていると考えられる。そこで次に、ベルクソンの自由にみられる必然性について検討したい。

第3節 有機的必然性の自由

ベルクソンの自由にみられる或る種の必然性は次のような記述に見ることができ。「私たちの行為が人格全体から発するとき、私たちの行為が人格全体を表現するとき、私たちの行為が人格との間に、作品と芸術家との間に時おりみられる定義できない類似をもつとき、私たちは自由である」(DI, 129)。この記述は、その人格全体を表現する行為が、つまり人格全体を必然的に伴う行為が自由行為であるということを意味する。逆の見方をすれば、「自由行為によって示される意識の諸状態は私たちの過去全体を要約する」(DI, 139) ということになる。

この点で、ジャンケレヴィッチのように⁹⁾、ベルクソンの自由は過去全体から引き出されるのであり、この自由は有機的必然性、すなわち自我による自我の決定であると考えられる。それゆえ、ベルクソンの自由が創造であるとしても、「自己による自己の創造」(EC, 7, ES, 24) である限り、この自由は「自己による自己の」という人格の連続性からくる必然性を伴うといえるだろう。

したがって、「行為が結びつく動的系列 *série dynamique* が根本的自我と一層同一化しようとするればそれだけ、その行為は自由である」(DI,

126) ということになる。この意味で有機的必然性の自由は、予見不可能性の自由と異なり、持続における連続性に基づいているのである。その結果、意識の諸状態の動的系列は、「自然的進展 *évolution naturelle* によって自由行為に到る」(DI, 129) とベルクソンは言う。

ただし、この自然的進展によって自由行為に到るためには知性的な働きを無視することはできない。というのは、『試論』の自由は感性的自発性にほかならないという非難に対して、『物質と記憶』でベルクソンは次のように述べているからである。「考える存在である人間において自由行為は感情と観念との総合と呼ばれうるし、そこに到る進展は合理的進展 *évolution raisonnable* と呼ばれうる」(MM, 207)。この合理的進展という点で、ベルクソンの自由において理性、あるいは知性の必要性が理解できる。要するに、知的存在である人間は、自由行為においても知性を媒介にしなければならない(MR, 16)。だからこそ、自己による自己の創造という自由行為は「自分がなすことを一層よく推論すれば *raisonner* それだけより完全である」(EC, 7) と、ベルクソンは言うのである。

さらに、決定論を知性の平面に追いやることによって、自由における知性の働きを無視しているというブランシュヴィックの批判に対して、「自由は心理的因果性そのものである」(M, 586) とベルクソンは答える。ただし、『試論』でも言われるようにこの心理的因果性は、自然界の物理的因果性とは区別されなければならない(DI, 151, 164)。物理的因果性においては、持続の意味での時間が介在しないので、原因としての前件とその結果としての行為との間には等価の関係がある。それに対して心理的因果性は、時間が介在するので、「前件には存在しなかった或るものの、行為自身による創造」(M, 586) を含んでいるのである。

以上で私たちは、有機的必然性の自由がどのようなものであるかをみてきた。すなわち、この自由は、自己による自己の決定に存しており、この決定の必然性は、人格の、つまり持続の連続性に基づいていた。そして、この自由には知性の働きが必要であり、ここで心理的因果性が考えられた。それでは、予見不可能性の自由においてみられた意志はこの有機的必

然性に組み込まれるのだろうか。言い換えれば、有機的必然性の自由が予見不可能性の自由を基礎づけているのだろうか。

この問題に対しては、ベルクソンにおける心理的因果性の合理性について考えなければならない。確かに、自由行為において私たちは明確な動機を、つまり理由を意識する (EC, 238)。そして、ベルクソンがブランシュヴィックに同意しているように、自己を決定する諸理由を一層明確に意識すればそれだけ私たちはより自由であると感じるだろう。しかし、この諸理由が自己を決定するのは、行為が潜在的に遂行されたときでしかない (M, 586)。要するに心理的因果性の合理性は、行為の実行の後にしか認められない事後的なものである (M, 713)。たとえ諸理由が決定する進行状態もまた一つの理由だとしても、この理由は諸理由と異なる本性でなければならないだろう。さもないと、理由の理由の理由……というように無限背進になるからである (M, 586)。したがって、心理的因果性が事後的であり、この因果性の諸理由を決定する理由が異なる本性だとするならば、心理的因果性が予見不可能性の自由における意志を決定しているわけではない。

この節で私たちはまず、ベルクソンの自由には有機的必然性があることをみた。しかし、この有機的必然性は予見不可能性の自由における意志を決定していなかった。なぜなら、有機的必然性における心理的因果性が創造を含み、事後的なものであるからである。それゆえ、有機的必然性の自由が予見不可能性の自由を基礎づけているのではない。

第4節 選択の自由

ここまで私たちは、ベルクソンの自由の特質として予見不可能性の自由と有機的必然性としての自由とをそれぞれ考察してきた。しかし、この二つの自由はベルクソンの自由の一側面を示すにとどまり、ベルクソンの自由の本質がこの二つの自由によって明らかになったとはいえない。

実際、二つの自由がベルクソンの自由の一側面を示すにとどまるのは、この二つの自由が、持続の相反する二つの特性にそれぞれ基づいているか

らである。すなわち、ベルクソンの持続は不可分の連続性と創造とを意味するが (EC, XI n.), 予見不可能性の自由は持続の創造という観点から、また有機的必然性の自由は持続の連続性という観点からとらえられたものと解釈することができる¹⁰⁾。

それでは、この二つの自由を両立させることは可能なのだろうか。そのためにベルクソンの自由を、連続性と創造とを意味する、理解し難い持続に追いやったとしても問題の解決にはならない。そこで、二つの自由の両立可能性を探るために、ベルクソンにおいて意志がどのように働くかをみてみよう。

前に指摘したように、ベルクソンにおいて意志に直接働きかけるのは、本能と習慣とを除けば、感受性しかない。この場合、自由が問題となっているのだから本能と習慣は除外できるだろう。さらに、障害をもつとせず知性を前進させるのは知性以上の情動 *émotion supra-intellectuelle*, つまり感受性である (MR, 43)。とすれば、ベルクソンの自由の本当の始まりは、この感受性にあることになる。したがって、この感受性が知性を媒介にして意志を働かせる、ここにベルクソンの自由の働く仕組みがみられるように思われる。

では、この感受性を自由の始まりとする自由はどのような自由だろうか。私たちはこの自由を選択の自由に見出したい。

しかしながら、選択の自由は、決定論に反論する第一段階の議論において決定論とともに却下されたはずである。また、選択の自由が主張されるためには可能性が想定されなければならないが、ベルクソンは可能性という観念を疑似観念として斥ける。つまり、ベルクソンによれば「可能的なものは、過去における現在の幻影である」(PM, 111)。したがって、この二つの点でベルクソンは選択の自由を認めていないようにみなされうる。

けれども、ベルクソンの主張をよくみてるならば、決定論に反論する第一段階の議論でベルクソンが非難しているのは、すでに遂行された行為を遂行されつつある行為であるかのように扱うことである。そして二つの対立する行動のあいだの選択を批判しているとすれば、それは選択の可能

性が等しいからである (DI, 131)。それゆえ、持続する自我が自由行為に到る進行においてであれば、選択の自由が認められないわけではない。

また、ベルクソンが可能性という観念を批判するのは、可能性が現実に対して観念的に先在するという見方である (PM, 115)。それゆえ、自由によって創造される可能性をも批判しているわけではなく、内的因果性（心理的因果性）では可能性が考えられている (DI, 158f)。実際、ベルクソンによれば「あらゆる瞬間に選択が課されている」(MR, 12f) のであり、自由行為がみられる厳粛な事態において私たちが選択するということをベルクソンは強調する (DI, 128, cf. DI, 179)。だからこそベルクソンは、事物の根底に持続とともに自由な選択を置こうとするのである (EC, 276)。

このようにみるならば、ベルクソンが選択の自由、つまり自由意志 *libre arbitre* について次のように語ることも理解できる (M, 834)。すなわち、ベルクソンの考える自由は、人格の独立性という意味での道徳的自由 *liberté morale* と自由意志との間に位置するが、二つのうちどちらかをとらなければならないとすれば、それは自由意志である、と語る。そして、この自由意志の選択において、二つの対立するものが等しい可能性をもって選ばれるわけではない、とベルクソンは付け加える。

そこで、ベルクソンが考えるこの自由意志、すなわち選択の自由と感受性との関係について考察してみよう。まず感覚についてみるならば、ベルクソンにとって感覚は自由の開始である (DI, 25)。つまり、感覚は未来の自動運動を素描、前形成するが、同時に自動的な反作用の運動に対する抵抗を示すものでもある。ここで感覚は、自動運動をするか、あるいは他の可能的な（自由な）運動をするかどうかの選択を促しており (DI, 26)、ここには選択の自由があるのである。

次に感情についてみるならば、自由行為において感情は、観念と行動との間に努力の感情として現れる (DI, 158)。ここでは、自由行為をなすために必要な努力が素描されたときでさえ、人はまだ中断する時間があると感じる。つまり、自由行為に必要な努力が示されたときにも、その努力を拒むことができるという点に選択の自由をみることができよう。

最後に情動についてみてみよう。『二源泉』で主張される自由は、自ら働きかつ《働きかけられる》魂 *âme à la fois agissante et «agie»* が神的活動と一致することにある (MR, 246)。この場合、魂が受けとる働きとは神的人々の呼びかけであり、この呼びかけは知性以上の情動に由来する (MR, 85)。この情動の力は、情動が私たちのうちに浸透するならば、抵抗しようとすることがない傾向性にある (MR, 45)。しかし、私たちは発し続けられる呼びかけを受け入れないこともできる (MR, 67)。ここに選択の自由があるといえるだろう。

このように、感覚、感情、情動をみるならば、選択の自由は、感受性によって示された自由行為に到る方向さえも拒むことができるという点に見出せるだろう。そして、感受性によって示された方向を選ぶならば、その選択は知性を媒介にして意志に働きかけることになる。この知性を媒介にして意志が働く過程は或る種の必然性に従うことである。しかし、選択者は、感受性において既に選択の自由を享受しているのである。逆に、感受性によって示された方向を拒めば、それは自己の自由を放棄することになる (DI, 127)。

それでは、この感受性によって示された方向を選択し行為に到ったとして、この行為が自由であるとしていえるのだろうか。ベルクソンは、しばしば喜び *joie* と 快樂 *plaisir* とを区別しているが (MR, 49, 57, 277)、自由行為に伴う喜びこそ自由の証であるように思われる (ES, 23)。なぜなら、ベルクソンにとって喜びは、自己自身に還らせることによって存在の驚きを経験させる感情だからである (DI, 8)。

以上、私たちはベルクソンの自由の基本的考え方をみるために、予見不可能性の自由、有機的必然性の自由、選択の自由を検討してきた。その結果、ベルクソンの自由は選択の自由に存し、この選択の自由を通して予見不可能性の自由と有機的必然性の自由が考えられた。そして、選択の自由は何よりも感受性に基づくということがみられた。

注

ベルクソンの著作からの引用・参照は、次の略号と頁数とを並記することによって示す。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P. U. F., 1961.

MM : *Matière et mémoire*, P. U. F., 1965.

EC : *L'évolution créatrice*, P. U. F., 1966.

MR : *Les deux sources de la morale et de la religion*, P. U. F., 1984.

ES : *L'énergie spirituelle*, P. U. F., 1982.

PM : *La pensée et le mouvant*, P. U. F., 1975.

M : *Mélanges*, P. U. F., 1972.

- 1) L. Husson, “Les aspects méconnus de la liberté bergsonienne”, in *Les études bergsoniennes* vol. IV, P. U. F., 1956, p. 162.
- 2) *Ibid.*, p. 161.
- 3) H. Hude, *Bergson I*, Editions universitaires, 1989, p. 119f.
- 4) V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, P. U. F., 1975, p. 77.
- 5) Cf. M. Barthélemy-Madaule, *Bergson adversaire de Kant*, P. U. F., 1966, p. 150; G. Bretonneau, *Création et valeurs éthiques chez Bergson*, S. E. D. E. S., 1975, p. 71.
- 6) Jankélévitch, *op. cit.*, p. 76.
- 7) *Ibid.*, p. 235.
- 8) Hude, *op. cit.*, p. 155.
- 9) Jankélévitch, *op. cit.*, p. 78f.
- 10) 同様の解釈はロビネにもみられる。「進行—異質性 hétérogénéité-progrès としての持続の概念は発出—自由 liberté-émanation の理論に訴える。消失の異質性 hétérogénéité d'évanouissement としての持続の概念は突発—自由 liberté-surgissement の哲学に開かれている」(A. Robinet, *Bergson et les métamorphoses de la durée*, Seghers, 1965, p. 35)。

(大阪大学文学部助手)